

# 東亞醫學

永川秀次郎長學題字

## 第二十三號要目

◆投稿規定◆  
讀者各位の投稿を歓迎す。  
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。  
長さは一〇〇〇字以下とす。

○醫療の普及と無醫村問題  
○古方と新方

- 歴史認識の問題…………… 龍野 一雄
- 男子の黄、小便自利する…………… 矢敷 有道
- 腹膜炎の鍼灸治療例…………… 岡部 素道
- 新陳代謝と摩擦中心の療法…………… 石原 保秀
- 大建中湯に就て…………… 深瀬 深造
- 同經刺治療二題…………… 柳谷 素靈
- 尿毒症治療…………… 大塚 敬節

## 醫療の普及と無醫村問題

醫療制度改善案中に、『醫療の普及』問題がある。處方箋強制發行問題に關しては、日本醫師會やその他の醫師の團體が、猛烈に反對を表明したが、この『醫療の普及』問題は、冷嘲であるのか、ボンヤリしてゐるのか、どちらであるか知らないが、特に此の問題を指摘して反對しないのを見ると、贊成と考へてもよくはないか。たゞ去る十一月三日の日本醫學研究會記念講演會の席上で、内山孝一博士が、此の問題を捉へて、反對を表明したことは注目し得る。

現代を毒する最大の毒薬は、功名心である。テガラを立てるといふことは、何と危険な火遊びではない。田舎の百姓と喜慶を共にし、その土地に骨を埋める覺悟がなくて、何が出来るやう。一時のお座なりでお茶をにごし、上司に媚態を呈して、成功に戀々たる有様では、無醫村救済ではななくて、無醫村破壊に終る懼れなしとしない。

府は無醫村救済の目的を以つて、學校を出たばかりの新醫學士を一定の期限を附して、無醫村に出張を命ずる様になるかも知れぬといふ。若しもかかる案が實現したとすれば、一番不幸な目に逢つて、迷惑を感じるのには、醫學士その人ではなくて、無醫村の人々であらう。都會に選んで成功することを夢み乍ら、無智な百姓を生きた試験管として、二年或は三年の間、殺人的行爲をなすことによつて、都會に於ては到底體驗することの出来ない、臨牀的經驗を積むこと

あつて、われわれの無醫村に對する醫療普及の對策は、かくの如き醫師を養成することにある。元來、無醫村が無醫村たる最大の理由は、その村に開業してゐては、生活が保證されぬといふ點にある。言葉を変へて言へば、収入が少いのである。故にかくの如くして養成した醫師には、一種の特典を與へて、生活の安定をも圖つてやる必要がある。最近

の調査によれば、全國に三千の無醫村があるといふが、その中でも都會や町の附近にある無醫村は、無醫村の如くにして、事實は無醫村としての不便を感じてはゐない。橋を一つ渡つた隣村には醫者があつるところが澤山ある。眞に救済を要するは、山間僻地の無醫村で、三千の中の幾割かがこれに該當するであらう。

派の興隆を限界とする。同じく復古を叫んだけれども、劉張學派は後世別派と呼ばれて、長山、東洞等の古方派と區別せられた。然らば、古方派と後世派との別は、陰陽五行、五運六氣を信ずるか、信ぜざるかによつて分れるのであつて、古方派が古方派たる所以は、傷寒、金匱の藥方のみを用ひて、新方を用ひないといふことにある。

## 古方と新方

支那の醫學は、金元の時代に至つて、朱子學の影響をうけて、復古の旗を掲げた。このことは、我が江戸時代に、古方家達によつて、醫學復古の叫びが擧げられたと同じである。即ち金の劉河間も素問の古へに還れと叫び、その當時天下を風靡した周天の學を排し、瀉火寒涼の劑たる黃連、黃芩、梔子、枳實の如きものを濫用した。河間の流を汲む張子和も亦素問、難經の古に還れと唱道し、汗、吐、下を主張し、疾病の原因は毒の蓄積であるから、攻下の劑によつて毒を體外に排泄すれば、身體は安正なりと論じ、大いに下劑を用ひ、恰も我國の古方家後藤良山が、病は一氣の滯滯に基くと論じて、順氣の劑を濫用し、又吉益東洞が萬病唯一毒、病は毒なり、毒を以つ

て毒を攻め、毒去れば病癒ゆと主張して、下劑を用ひて妄攻したことを軌を一にする。然るに彼れにあつては、性理の學の影響をうけて、五運六氣の説を牽じ、我れにあつては、素問、難經は偽書なり、取るに足らずと稱して、五運六氣の説を斥けたと彼等曰く、人は天地陰陽の氣をうけて生れ、五行を内に藏す。故に人は小天地にして五運六氣の司配するところである。疾病の生ずるも、疾病の治するも皆、五運六氣に關係しないことはない。彼等は五運六氣に基いて、その醫學を體系づけんとした。かかる醫學が觀念論に終始してゐるのは、その著述に明瞭に現れ、金元以後の支那醫學の特徴をなしてゐる。

右四ヶ月間毎日午後六時より九時迄

詳細ハ來月號ニ發表ス

## 拓殖大學漢方醫學講座

昭和十六年度

## 第五回 拓大漢方醫學講座

自 昭和十六年 四月 一日

期間 至 同 七月 卅 一日



# 男子の黄 小便自利するは 當に小建中湯を與ふべし

## 矢數有道

小建中湯を黄疸に用ふべき場合が存することは、標題に示すやうな金匱の文句を見ても不思議ではない。しかし私は最近に至つて始めてその應用例に遭ひしとしてよく奏功した。興味ある報告例と思つたので次に詳述してみる。

患者は臺灣の人であるが、商用のため内地に來られ、縁があつて私の所を訪れた。病歴として本人の語る所は、本年四月に病氣となり膽囊炎と診斷された。當時の病状を詳細に訊くことが出来なかつたが、發熱はなかつたそうである。一時全く治つたと思つたが、八月になつて再發した。今度は肝臓肥大と黄疸とを伴つて、それが今日まで少しも消えない。粥食と下劑運用のため、漸々に體重を減じて、現在では病前の十六貫から十二貫程度になつてしまつたといふ。

初診。十月十八日、再發後すでに四十八日になる。商用のため病氣を押して内地各地を旅行してゐる内に、今月十一日、栃木縣で突然大腹痛に襲れ、注射でやうやく凌いだ。五日目に同様の激痛があつて、今度も注射で押へた。東京の醫師は膽石病といふ。頑固な黄疸と激痛の襲來日とおひえて獎める人があつて來院した。

診ると著明な黄疸色である。皮膚が痒いといふ。絶えず上腹部の違和と微かな鈍痛とを覺えてゐる。粥食と連日の下劑のために自覺的に疲勞感が強く、だるくて堪らぬといふ。食欲は可良であるが、餘り食べない方針である。大便は下劑のため軟い。下劑氣味から下劑はやめられぬと考へる、と患者は附言した。小便はもろろん黄疸色を呈し、分量も少い。脈は弱い。腹は虚軟で何處にも拘攣も塊りもない。右脇下は堅痛があるが胸脇苦満もなにもなく、寧ろ虚陷してゐる。下肢が冷えるといふ。發病前に血脈は一六〇耗あつたが、現在は一二二耗である。これは衰弱の結果によるもので、別に治癒したわけではないことは患者も承知してゐるやうである。

## 診 断

西洋醫學では膽石症に下劑は定石であらうが、この患者の現在の状態は下劑の禁忌證であることを私は患者に告げた。粥食のため穀氣不足してゐるところを下劑の連用によつて脾胃を損じ、更に肝虚の状態となつてゐる。腹痛發作は寒傷論のいはゆる太陰病裏寒の腹痛であると斷ぜざるを得ない。即ち「甘藥を以て中氣を補すべし」と考へ、小建中湯を處方した。金匱の「男子の黄、小便自利するは當に小建中湯を與ふべし」の條に合致するものと考へた。

## 經 過

非常によい。藥をのむたびに氣分がよくなつたといふ。三日目に小便が奇麗になる。大便も下劑

なしに快通がある。皮膚癢痒もなくなるし、腹痛全くなし。食欲進み普通食とした。尤も初診時に私がそれを獎めて置いたが、五日目に來院した時は、皮膚の黄疸色は九分通り薄らいだ。こんなに漢方藥は効くものかと（一）それほど効かぬ場合が相當にあるが（二）感嘆して、一ヶ月分の藥を所望して無事に歸臺した。方證相對の妙味ある稀しい一例の報告。

## 考 按

さてこの患者について「小便不利」といふことが問題になる。金匱では「小便自利」といふ條件を提示してゐる。黄疸病は發熱に因るものが多い。小腸病か陽明病かである。また小便不利は發熱の症狀である。「陽明病、無汗、小便不利、心中懊惱する者は、身必す黄を發す」とあり、陽明病發熱汗出づる者は、黄を發すこと能はず、但頭汗出で、身汗なく、頭頸して還り、小便不利して渴して水漿を引く者は、身必す黄を發す、（これ發熱裏に有りとなす）茵陳蒿湯之を主るとあるやうに、この患者が黄疸病でも小便自利するものがある。その一つは瘀血によるもの（太陰病篇）である。當湯候參照）他の一つは虚寒に屬するものである。發熱によるものは茵陳蒿湯を以てこれを下すもよいし、小便不利するものに茵陳五苓散を、胸脇の鬱熱によるものは大小柴胡湯、梔子鼓湯など、それら消痰利尿開通劑を用ふべきであらうが、この患者には勿論それらの適くべき證は見當らない。この患者は別に小便自利の候はない、寧ろ不利に近い。従てその點だけで考へると虚寒の黄疸ではなからず、發熱性のもといふことが出来るが、本病が裏虚寒の證であることは、他の症候群によつて嚴然たる事實となつてゐる。こうゆう場合私は必ずしも金匱の文字

## 腹膜炎の鍼灸治驗例

### 岡 部 素 道

に拘泥すべきではないと考へ、即ち小便量の多寡は本病の診斷に主たる役割を果すものではない、といふ見解をとる方針を持してゐる。小便不利に對する小便自利の診斷的價値は、前者が發熱性黄疸の標準となることに對し、後者は虚寒性黄疸の證據として記載されるべきものである。金匱の著者が本方運用の主治目標として小便自利の文字を用ひたのは「虚寒に屬する黄疸」といふ説明であると思ふべきであらうと思ふ。従てたとへる小便自利の候がなくとも、虚寒の

確徴が揃ひ得らるれば、本方を用ひてもよろしいのである。病人は有機的存在であるから、金匱の文字をその儘に拘泥してゐる言葉の裏にひそむ著者の眞意を洞察するやうにせむと方證相對論も現實に於てその脆弱性を暴露せねばならぬことになる。

因に、金匱の著者が「男子」の二字を冠せしめた眞意を知ることが難しい。女子の黄疸には本方の證が全然ないといふわけではあるまい。経験者のこれが解明を期待する次第である。

腹膜炎の治療は鍼灸のみならず一般醫家に於ても難中の至難とされて居る。ところが經絡經穴を活用し刺鍼灸すれば、驚くべき良效を得ることが出来る。以下一例を擧げて讀者の參考に供しよう。

○田〇子 二十二歳 女 既往症及び現在症 子供の時から胃腸病に罹患し易く、月に二、三回は腹痛や下劑を患ふ。風邪引き易く、其の度毎に人中の時にフキ出物が出來、月經不順の時には月二回あることもあり。體格は小さく瘦形である。甘味を好み、特に果物を能く喰ふ。

二ヶ月前食傷が素で下劑が一週間も續き、其の後で腹が脹り膨満したので其醫師に診察を受けたが結果はよく無く、下劑一日三四回、小便少く（一日二三回量七〇〇一〇〇〇瓦）、全身に水腫を來たした。そこで余の話を聞き退院して治療を求めた。

ことが出来ず、亦脾胃虚に依るものが多い様である。或は脾胃によつて他の經を犯す場合もあるが、それは證に隨つて經絡經穴を撰び用ふべきである。

若しくは瘀血、若しくは硬結積聚等を感じる所がある。その部を淺く輕く(深刺は不可)散鍼様の補法を以て施鍼すると前記の證や痛は次第に減退するものである。

本病は亦看護法や養生を注意しなければならぬ。それ等兩者を併用すれば完全な治癒を擧げることが出来るのである。

之れを要するに大體に於て腹膜炎は腎經脾經の變動に依るものが多いが、その他證に隨つて方を擧げて經絡經穴を活用すべきである。

本病は特に腹診の際、腹を軽く按察すると部分的に指下に冷たく

### 新陳代謝と摩擦中心の療法

石原保秀

「流水腐らず戸欄蟻まず、動けばなり、形氣亦然り。形動かずんば則ち精流れず、精流れずんば則ち氣滯す。鬱、頭に處れば則ち腫となり風となる。耳に處れば則ち痛となり聾となる。目に處れば則ち瞶となり盲となる。鼻に處れば則ち鼻と鼻となり瘻となる。腹に處れば則ち腹となり疝となり。足に處れば則ち脚と脚となり蹠となる。」とは、有名な呂氏春秋數篇の言葉だが、名古屋支醫の一氣留滯論や、之を推廣した樺庵の虛鬱論。扱は吉益東洞の萬病一毒論、之を敷衍した南涯の氣血水論なども、大抵は之等の議論に出發したものだと思はれるが、之は又獨逸僱諺の「休むと錆びる」珠琳禪師の「水るまも無し水車」の類であつて、氣血の流通が順序能く行はれ、さうして糟粕が滞らずに二便から出たならば、思ふに百病に度つて病が無く決して四肢百骸を病ませるやうな

ことも、極めて少ないのではあるまい歟。と私は常に思つて居る者である。

要するに新陳代謝の問題である。即ち新陳代謝が旺盛であつたならば、先づ以て普通の病氣などは、殆ど起り得ない。隨つて最近或る一部者に依つて唱へられるとか無いか、將た之に類似した様の議論は、自ら影を消して仕舞ふものではない歟。

再言すれば、何處迄も新陳代謝である。新陳代謝なるかなで、諸種隨つて、殊に此處二十餘年、諸種の療法、私に鍼灸及導引(靜坐、呼吸、操體、摩擦)等の諸法を參照して、一種の新發療法(乾浴)を工夫宣傳して居る者であるが、唯遺憾なことには、私の聲は餘りにも小さく、其力は如何にも微弱のものであつた。爲に今日に至るも必ずしも盛行の域に至ら

ず、隨つて偶々微恙を得たのを機會として、本會の第一線からも退き、自ら新陳代謝して、靜かに餘生を馬尾庵に送つて居る次第であるが、最近不圖我長敬すべき一知友から、偶々乾浴に關する書狀に接したのは、近頃快心事の事項であつた。所が該書狀中に「某都市に於ける佛教婦人會、又カトリック教會關係の婦人會に於ては、最近結核患者に對し、何れも摩擦を中心とする療法(乾浴に非ず)を實施中であるが、其成績は頗る良好だ」との一節があるのを讀過して、思はず案を拍つて、是れあるかなと叫んだ様の次第であつた。

さもさうづ摩擦は軒岐以來の自然原始的の療法である、成る程原來的の療法であるが、之を今日の言葉で言へば、即ち皮膚の強固法に外ならぬのである。其皮膚を強固にして、新陳代謝を旺盛にすること、即ち其内臓を強固にして、鬱を驅逐する所以に外ならぬのである。其其法は簡易其効力は確實、決して他の追隨を許さぬ底のものなのである。有體に言へば、私も三十餘年前、義兄其他に甚を投げられた結果、自ら發奮して自己の呼吸器病を治し、幸か不幸か今日に至つた一員である。爲に之を信ずることも人一倍に厚きことは、改めて言ふ迄も無い所である。此意味に於て事に治療に従ふ程の仁は、必ずや一顧を與へらるべき療法であり、各地の結核療養所等に於ては、是非共試むべき優越的新療法だと私は信じて居る者である。私に醫籍を寄せられた一知友氏は現在醫療の第一線に立つて、東西の醫學の攻究に精進中の新進科學者であるから、斯様の人々に依つて、必ずや近き將來には、當に摩擦のみならず、私の乾浴の如きも、亦類試實驗せられ新見新體制を以て本誌其他を賑はすことであらう。

### 大建中湯證に就て

深瀬眞造

#### 一、緒言

金匱要略の大建中湯證を讀むに見方より之を「心胸中大噯嘔不能飲食」にて句切り一定候と更に「腹中寒上衝皮起出見有頭足上痛而不可觸近」を一症候として心胸部即ち心窩部と腹部との二つの異なる疾患として考ふ餘地なきにはあらざれども二症に別つとすれば前段の症に於ては寒より來るこの痛みを缺く故に一症の獨立性を失ふ因て胸腹の症候が同一疾患に襲來したるものとして湯液家として論ぜず本業たる鍼灸家の立場より研究を試みんとす。

「上衝して皮起り出で見れ頭足有りて上下云々」とある如く腸管の運動と腹壁の膨隆と一致し外觀の不規則なる波状を呈す本症の痛の本質は機質的變化に因るにあらず知覺神經が寒を受け其の刺激により興奮して發揮したる劇烈なる發作性の疼痛と之に伴ふ腸の逆蠕運動にして論の痛みて觸れ近くべからず」とある如く發作時に手を軽く腹壁に接するも患者は疼痛に耐え難く觸るや否や直に「ア痛」と高聲を放ちしことを實驗せり。

(4)、外邪たる寒は體內に深く潛入して滯留し之れがため數々發作性の痛痛を起し上に述べたる諸症候を呈するものなり。本症に見る脈證は恐らく緊系統の證を現はすものならんと思はれる。今左に察病指南と稱する書籍に記載しある脈論を掲げ本症と對照して研究を試みんとす。

#### 二、病情

(1)、心胸中大に寒云々」と「腹中寒云々」を考ふるに論の如く本症は寒性即ち冷えの體內に侵入して惹起したる疾病にして寒邪に因る陰性症候たるや明かなり。

(2)、嘔を別ちて陰證と陽證との二つとす本症の場合「心胸中大にあつて心腹中所謂胃部の寒」と腸管拘急運動の餘波との二つの原因より招來したる嘔にして霍亂、食中毒等の如き積極性のものであらざりして之亦陰證のものなり。

(3)、本論の「腹中寒上衝して皮起り出で見れ頭足有りて上下して痛み觸れ近くべからず」を考察するに劇痛ある腹部の疾患の其の多くは腹壁緊張して板の如くなるに本症に於ては腹壁柔軟にして腸管の逆蠕運動による拘急の状態腹壁上に現れ論の如く

(四)

遲にして瀯は胃中冷え凝結あり難にして時々一止手を輕めば乃ち得手重ければ必ず手を按せば數々浮して力を輕じて竹刀を刮が如し或は曰く三五調はず雨の砂を沾すが如し故に名けて瀯と云ふ(即ち黃帝の瀯脈なり王永云く陽氣餘りあるときは血少し故に脈澀は身熱して汗無きを主る此の言信するに足らず其の實は陰虛の脈也血氣足らずして痺する事を主る)



四、病名

(三陰三陰の別)

上文二、三に述べたる如く本症の病位は裏にありて陰虛證を證明せられ又裏虚に因る嘔吐、不食、筋拘急、心腹痛等の諸症を見し病勢の最も劇烈に拘急する部位は奇經八脈の帶脈に相當するものと信ぜられ太陰病にして西洋流に命名すれば腸神經痛即ち腸疝痛ならん?

五、治療

前掲述べたる如く本症は寒冷に禍ひされたる胃腸の機能減弱と障礙並に劇烈なる筋の拘急疼痛とに因る太陰病にして湯液家の療法としては温熱和劑たる本問題の大建中湯を投じ寒を和し其の本を治すにあり鍼灸家に於ても本を滅するを根本療法となし之れに標た

る痛並に嘔吐等を鎮靜する目的として治療點と手技を採擇せんとす左に其の要穴と鍼術の手技の概略を掲げん。

(甲) 鎮痛兼和法  
中腕(亂鍼又は雀喙)、上腕(同上)、上腕(同上)、天樞(同上)、章門(同上)、水分(同上)、足三里(温鍼)、陰陵泉(隨鍼)、三陰交(同上)。

(乙) 和法  
期門(温鍼)、氣海(熱行鍼)、關元(曉鍼)、間使(曉鍼)。

以上の要穴のみにては治療の目的は達し得らるるならんも、發作時に於ては先づ腰背部に要穴を求め之れに刺鍼して拘急と痛みとを緩和し然る後證に應じ以上の甲乙二法を取捨選擇して治療するも一方法たるべし灸術に於ても以上甲乙に掲げたる穴を應用して行ふものなり。

同經刺治驗二題

柳谷素靈

第一例 肩胛關節神經痛(五十歳男)

現症 一ヶ月位前より漸次肩胛關節の運動障礙を起し、壓重感、疼痛感もあり、最近では着物の帯も結び得ざるに至つた。此間服藥注射療法、電氣、蒸熱、短波療法を轉々するもだん／＼悪くなるばかりにて輕快せざるが故に、灸治を思ひ立つたと云ふ、脈緊性にして洪浮なり、熱なし、便通結す。平素飲酒す、患肢を下にして側臥するを得ない。腹症や抵抗あり。治療、肩胛關節にして患部を通過する経絡は大腸經、三焦經、小腸經なり、從つてその経絡を指捜す所謂經絡診による経絡の異常を發見せんとするにあつた。そのい

第二例 環指疼痛性彈發指(五十歳女)

現症 脈沈緩、皮膚色黒し、十數日前より、右側環指屈伸に疼痛あり、且つ、屈して然る後伸展せんとすれば環指のみ伸展し得ず、や／＼腫れあがるが如きも、熱感なし、経絡は三焦經なるを以つて三焦經の検査を行ふ、

尿毒症治療

大塚敬節

第一例

去る十一月六日、六十二歳の婦人を往診せり、病氣は慢性腎臟炎であると云ふ尿毒症の症状が顯著であつた。即ち浮腫は全身にありて、喘咳、呼吸困難を訴へ、時々發作性に喘息様の呼吸困難が起りその時は殆んど意識が不明になる云ふ。これ迄いろいろの手當を施したが次第に發作は劇しくなりいつ死ぬか判らぬと醫者より宣告を下されたと云ふ。

第二例

且て矢數道明先生が尿毒症に五苓散を用ひて著效を奏した例を本誌に發表された事があつた。私も恰度二ヶ月程以前、尿毒症の患者に五苓散を用ひ一時非常に奏效した例を持つてゐる。矢數道明先生の例もその後病狀が悪化したと云ふ事を聞いたが、私の場合もこの頃は又病勢が逆轉の状態にある患者は五十四歳の婦人であるが數年前より腎臟炎があり、最近はその方の眼があまり見えなくなり、頭痛及時々下痢を訴へ、眩暈、耳鳴りもありて食慾は殆んど無い。然し一週間程前より嘔吐が始まりて醫者の藥も皆吐き、水も受けつけなると云ふ状態であると云ふ。診ると顔色は蒼白であるが浮腫は無い。尿は一時間に數回あるが一〇瓦一二〇瓦宛しか出ないと云ふ。

昭和十五年に於ける

協會關係主要事業經過

一月 十四日 小石川傳通會館に於て、日本醫師生藥購買組合結成式學行す。

二月 蘇州國醫院々刊創刊號發行さる拓大教材中木村長久氏漢方治療各論、矢數有道氏漢方醫學總論、東亞醫學中大塚敬節氏脚氣の漢方療法等を翻譯掲載す。

三月 八日 東優總會にて理事一同帝國ホテルに招待を受く。

四月 一日 第四回拓殖大學漢方醫學講座開講、聽講者七十九名。

五月 廿五日 皇紀二千六百年奉祝、東亞醫學協會五周年記念大講演會を午後一時より神田東京醫師會館に開催、拓大宮原民平學監より協會旗推戴式あり次の講演會に於て晚餐會。

なすと云ふ。引續き五苓散を與へてゐるが最近又頭痛が劇しく、夜間もよく眠れないと云ふ。この様な状態であるからとて全治はを附言する。

困難と思ふが、とにかく五苓散にて一時の急を救ふ事が出来たので報告して置く次第である。

- 一、養元龍甲散の運用に就て 矢數道明氏
- 一、鍼灸治穴配合の構造 柳谷素靈氏
- 一、傷寒金匱の藥物の再吟味 渡邊 武氏
- 一、瓜呂枳實湯の應用に就て 木村長久氏
- 一、副食物と腹候との關係に就ての一考察 小出 壽氏
- 一、内經の研究態度に就て 矢數有道氏
- 一、閉會之辭 木村長久氏
- 六月
  - 八日 湯本求真氏父子祝賀會築地に於て。
  - 九日 拓大講座生北鎌倉へ藥草採取ハイキング。
  - 十六日 小石川傳通會館に於て日本醫師生藥組合の新方針懇談會
  - 十八日 上野松園にて上海興亞院連絡部防疫官に決定せる本多精一氏壯行會を開く。
  - 十九日 上海支部長本多精一氏東京歸途午後九時。
  - 廿七日 新宿三河屋にて滿洲視察を終へて歸京せる栗原廣三氏歡迎會を開催す。
- 七月
  - 十一日 理事矢數道明、龍野一雄兩氏、滿洲國民生部保健司より同國漢方醫學及漢醫の行政改革に就き招聘され夜十時廿五分出發。
  - 二十三日 矢數道明、龍野一雄兩氏歸京。
  - 三十日 協會理事會にては拓大應接室に於て、矢數、龍野兩氏歡迎會開催す。
- 八月
  - 八日 漢方醫學の特殊性格を闡明する第一回拓大漢方醫學夏期講習會開催。
  - 漢方醫學の診斷治療學の特異性 矢數 有道氏
- 九月
  - 九日 漢洋兩醫學の臨牀的比較檢討 大塚 敬節氏
  - 日本に於ける漢方醫學の特異性 龍野 一雄氏
  - 十日 木村醫院見學。
  - 十日 九日に同じ。
  - 十一日 津村藥草園見學、代用食試食會、藥草採取栽培法に就て 渡邊 武氏
  - 十二日 婦人病皮膚病の漢方療法の特異性 矢數 道明氏
  - 淺田宗伯、今村了庵、淺井國幹三先生を語る、谷中安立院にて 安西 安周氏
  - 十三日 漢方藥物學の特異性 清水藤太郎氏
  - 東京醫專に病理標本見學。
  - 十四日 鍼灸醫學の特異性 柳谷 素靈氏
  - 十五日 日本食養學 小出 壽氏
  - 肋膜炎の漢方治療法 多々良 素氏
  - 十八日 東邦醫藥社主催日比谷松本樓に於て、矢數、龍野歡迎會を兼ねて、大陸醫學を語る座談會
  - 廿一日 第十四回例會を拓大講堂に開催す。
  - 滿洲國に於ける漢方醫學及び漢方醫の事情報告 理事 矢數 道明氏
  - 理事 龍野 一雄氏
- 十月
  - 十五日 小柳賢一氏歸還せらる。
  - 三十日 第四回拓大漢方講座終了式終了者五十二名。
- 十一月
  - 十一日 醫療制度改革案に對處すべき請願運動起る。
  - 十五日 協會新機構決定す。
  - 十八日 新宿丸きんにて協會理事會決算報告。
  - 二十三日 第十六回例會を拓大講堂に開催す。
- 十二月
  - 一、拓大第四期同窓生は懇親會を小石川後樂園内涵徳亭にて開催、栗原廣三氏清水藤太郎氏矢數道明氏の講話あり。
  - 五日 理事協議會を事務所にて開催、來年度講座擴充案を協議す。
  - 十三日 拓殖大學當局と理事一同青山辰好亭にて協議懇談會。
  - 二十三日 第十七回例會を拓大講堂に開催す。

會を傳通會館に開き新方針に移行す。

九日 協會附屬漢方圖書館設置

十日 協會新機構決定す。

十一月 醫療制度改革案に對處すべき請願運動起る。

十二月 拓大第四期同窓生は懇親會を小石川後樂園内涵徳亭にて開催、栗原廣三氏清水藤太郎氏矢數道明氏の講話あり。

理事協議會を事務所にて開催、來年度講座擴充案を協議す。

拓殖大學當局と理事一同青山辰好亭にて協議懇談會。

第十七回例會を拓大講堂に開催す。

### 富士川游先生逝く

富士川游先生はかねて膽石病再發のため御療養中の所膽囊炎を併發して十一月六日遂に永眠された先生は廣島縣の人、號を子長と云ひ日本醫學史の權威として世界的な方であつた。

漢方に對しては之を歴史的なものとて取扱ひ、過去のまゝを復活することは喜ばれなかつたが、漢方を科學的に研究することによつて新しい日本の醫學が生れることを望んで居られた。

著書には日本醫學史をはじめ日本疾病史、内科史、日本醫學史綱要、小兒科史、眼科史、醫學と迷信、醫術と宗教、醫談、譯解漫遊雜記 The Medical history and Medical education in Japan 等がある。

○伊澤凡人氏は、最近春陽堂より「藥草の科學」なる新著を刊行された。

○日本漢方醫學會、日本醫學研究會は、聯盟で、全國の漢方醫家多數の賛助を得て、醫療制度の改革に善處すべく、運動を開始した。

### 消息

○早田義三郎氏は去る十一月十六日、下谷上根岸の自宅で、腦溢血

### 昭和十五年度 拓大漢方講座教材分冊頒布

- 一、傷寒金匱要方解説 大塚 敬節 著 送料共 一圓七拾錢也
  - 一、漢方治療各論 木村長久 著 送料共 一圓六拾錢也
  - 一、漢方治療各論 矢數道明 著 送料共 一圓五十錢也
  - 一、後世方解説 矢數道明 著 送料共 壹圓也
  - 一、漢方醫學總論 矢數有道 著 送料共 一圓五十錢也
  - 一、漢方醫學講義 龍野一雄 著 送料共 一圓五十錢也
  - 一、經驗藥方分量集 大塚、矢數、木村 查定 送料共 五拾錢也
- 右七種の教材残本あり分冊頒布す御申込み順に發送す。代金は總べて協會振替或は爲替を以て前金にて御拂込みを乞ふ。朝鮮、臺灣、中國、滿洲は送料二十錢増のこと。
- 東京市牛込區新小川町二、七(温知堂内)
- 電話牛込(34) 二七七二番
- 振替東京 一一九三〇番

**本誌誌代納入者芳名**

- 金壹圓六十錢也 (横濱) 山崎 治助氏
- 金二圓四十錢也 (東京) 安達捨次郎氏
- (島根) 福本榮次郎氏
- (兵庫) 梅村 隆保氏
- 金二圓也 (兵庫) 竹内 達氏
- 金壹圓二十錢也 (東京) 渡邊 靜氏
- ( ) 板倉 てる氏
- ( ) 中島 久氏
- ( ) 加藤 乘風氏
- ( ) 田島増次郎氏
- ( ) 杉山 俊夫氏
- ( ) 馬場金次郎氏
- ( ) 川口平三郎氏
- ( ) 森川 斌氏
- ( ) 緒方 梅次氏
- ( ) 姜 德 順氏
- ( ) 内山 貢氏
- ( ) 大山 信男氏
- ( ) 副島 序吉氏
- ( ) 佐々木 高氏
- ( ) 根津嘉一郎氏
- ( ) 山田 貞夫氏
- (横濱) 中山 玄義氏
- ( ) 新屋忠三郎氏
- (長崎) 小野 正擴氏
- ( ) 深見 浅一氏
- ( ) \*福田久美子氏
- (京城) 稻田 行男氏
- (北支) 武藤 敏文氏

**本協會寄附者**

- 一金五百四拾九圓六拾貳錢也
- 拓大漢方講座講師一同
- 一金五拾圓也

理事 匿名  
昭和十五年年度決算報告を去る十月十六日理事會に於て發表す。

**拓殖大學漢方醫學講座の新躍進**

第五回拓大漢方醫學講座は明年四月一日より實に内容を充實し、時局に即應せる講義を加へ、毎週土曜日日曜日を除き、六日間定である。

**漢方圖書館整理着々進む**

拓殖大學漢方醫學講座協會並に拓大講座附屬圖書館は

**東亞醫學協會 十二月例會**

——特殊研究發表會——

**演題**

一、齒科領域に於ける漢方治療の研究 正會員 中原富一郎氏

二、漢方醫學の振興策に就て 正會員 高柳 米壽氏

三、漢方醫學界に望む 正會員 熊野可一氏

四、漢方醫學と心療法に就て 正會員 岩田 基宜氏

日時 昭和十五年十二月廿三日(月曜日)午後正六時開會(時間厳守)  
場所 拓殖大學講堂 會場費 三拾錢也

**東亞醫學協會**

連續して講義を進め、四ヶ月間に於て終了する豫定である。講義時間は從來の七ヶ月分に相當し、更に希望者に對しては九月より二ヶ月間に亘つて研究科を講義してより、引續き本月十一日より四日間専門的研究を高めることになつた。その詳細は一月號に於て發表の豫

講座をされた方々は次の如くで厚く感謝する次第である。  
原啓子氏二回、海野祺惠氏二回、河西みち子氏二回、根岸傳氏一回、宮前次夫氏一回、海老名龍雄氏一回、山本平一郎氏一回、杉野嘉治雄氏一回、深堀賢治氏二回、山口助市氏一回、岩田基宜氏三回、中内善馬氏二回、野田一之丞氏一回、安達捨次郎氏三回、飛澤繁治氏(矢數代理)六回、大塚理事、龍野理事、矢數有道理事。

**拓大第四期同窓會の集ひ**

去る十二月一日午後一時より小石川後樂園内涵徳亭廣間に於て、高柳米壽氏主催にて同窓會員招待大懇親會を開催し、定刻一同は晩秋の色濃き園内を漫步、日本庭園の粹をこらせる絶景を賞し、和氣園に満ちて二時より懇談會に入る集るもの三十餘名、先づ栗原廣三氏の民間藥の將來に對する抱負、清水藤太郎氏の漢方の虚實問題解決の捷徑と日常服用藥方の解説、矢數道明氏の和漢經驗方の再吟味の話あり、終つて會員の質問希望等あつて、晩餐の馳走を受け、夕闇迫る頃一同半日の清談を樂しみ散會した。尙ほ第四期同窓會幹事はこの集會を意義ある發足として年四回同窓會を開催することとなり、協會事業に對して強力なる團結を以て協力することを申合せた

**漢方醫學青年指導會の動き**

東京醫學專門學校漢方研究同志會發會  
十二月九日、新宿驛前、常盤に於て、東京醫學專門學校漢方研究同志會は發會式を行ひ、同校先輩にて本協會の理事及幹事たる、小出壽、矢數道明及有道の三氏を招き、漢方

**東亞醫學協會 講演集 第一輯**

第一輯

本講演集は拓大漢方講座五周年記念講演會に於ける講演を纏めて一冊としたもので、漢方と漢藥掲載のものを別冊として新しく裝幀したのである。總頁五十三頁、内容は、

- 一、葶苈驚甲散の運用に就て 矢數 道明
- 一、和田東郭の研究 — 大塚 敬節
- 一、日本醫學への道 — 渡邊 武
- 一、傷寒金匱の藥物の再吟味 龍野 一雄
- 一、古代印度醫學に於ける 鍼灸經絡に就て 矢數 有道
- 一、陰陽の概念規定に就て — 木村 長久
- 一、内經の研究 — 柳谷 素靈
- 一、瓜呂枳實湯の運用 西澤 生惠
- 一、鍼灸治穴配合の構造 清水藤太郎
- 一、五行論に對する一考察 小出 壽
- 一、人蔘の心下痞鞭論
- 一、副食物と腹候との關係に就て

定價 一部 五拾錢也 送料共

申込所 東亞醫學協會宛

醫學研究の動機、その研究方法、醫學界の現在及將來に對する動向等につき質疑應答し、感々協会の青年指導會の力強き發足を見ることとなつた。詳細は來月號に發表す。

### 來春一月號は日華醫學交驛

### 特輯號として刊行

本誌はその使命とするところの日華醫學の文化提携のため努力し來つたが、來春一月號は、日華醫學交驛特輯號として刊行の豫定であり、左の如き中國に於ける漢方諸大家に夫々、次の如き書面を送つて、原稿を依頼した。

敬啓者、烈際秋冷、遙維起居佳勝、至以爲頌。茲另郵上微協議會機關誌「東亞醫學」一冊、敬請查收、並予指教。敝刊擬於明年昭和十六年一月、出一日華醫學交驛特輯號、萬請將佳稿惠賜刊登、用光篇幅、忙中費神、殊深歎仄、惟此實有振興東洋文化並中日親善之意、千祈勿却是幸。大著題目以及長短、均聽自便、惟請於本年十二月二十日前後郵下、俾得於十二月三十日前後收到、無任感盼之至。  
昭和十五年十一月二十日中  
東亞醫學編輯部謹啓

### 先生

### 中華民國各地代表住所、芳名

天津 張傑臣氏、傅汝勤氏、黃際午氏、王玉事。  
濟南 楊正民氏。  
兗州 張珠安氏、桃東生氏、高其湘氏。

徐州 孔憲謙氏。  
呼埠 宋立人氏、蔣子璉氏。  
南京 隨翰英氏、汪紹生氏。  
太原 增喜氏、增賢氏。  
運城 陳世俊氏。  
開喜 楊復成氏。  
大同 韓熙文氏、賀宗海氏。  
包頭 錢問停氏。  
北京 施今墨氏、孔伯華氏、薛龍友氏、肖逢春氏。

### 代田文誌氏の隨筆

### 「閃光記」を読む

〇 生

代田氏の閃光記を読んだ。此書は、病者を診察し、又は見舞ひ聞く態度感じたことの数々、病者を慰めるべく書き送つた数々、病者をして生死に對する安心を與ふるために説き聞かせたことの数々、さうして自らが醫の職にたづさはりつつ、または一個の人間として悩み苦しみがきつ、道を求めてあへぐ心に閃いたことの数々を記しつづけたものが、積り積つたものだ、代田氏は序文の初に書いてみられる。更に代田氏は筆を

つづけて、「私はかつて二十四歳の大陸血の折に、病床で種々の書物を読みましたが、どうもしつくりした讀み物がなくて遺憾に思ひました。たまたま元政上人の草山集を讀むに及んで、心の渴をいやされたのです。さうして思ひつづけました。病者には病者のための文學や隨筆が必要であるといふこと」とを、言はれてゐる。此書の刊行はかかる代田氏の美しい心から生れた。「病者には病者の世界があるのです。實際病氣をした人でなくては解し難い世界があるのです。私も長い間、病氣した經驗をもつてをり、病中に思ひつづけて、一生病者

の友とならうとの心願を起したのであります。その思ひが常に心に掛つてゐて、かうした記録となつたのです。従つてこれは病者への贈り物として書いたものである」といふが、健康な人も、醫者も、これを讀むことによつて、心の塵が洗はれ、魂の皺がのびるから不思議である。

殊に私が感じたことは、何事もいややうに淡々と語られる中に、不思議と魂に喰入るものがあつてそれが私に反省を促す。別に教訓めいたものを書いてあるわけではないのに、讀者に迫り、自分の生活を凝視せしめる。ペンで生活してゐる人の如き、職業意識のないところに、人をひきつける力がある。

同書には處々に短歌がはさまれてゐる。これがまた、たまらなくいい。その中の二三を引用する。

〇やがて來む春をたのみてみ雪ふる冬の寒さも堪へてゆかまし  
〇つがなく君よあらせよ雨風の吹かば吹くがに身をまかせつつ  
〇遠く來て電車おれば薄やみにほのかに匂ふ梅の花かも  
〇あかつきのさ庭を見れば芍薬の芽のくれなるに雨ふりてをり  
〇逢ふ人のひとりひとりと言をか

はし  
ふるさとの村はなつかしきかな  
〇因縁のおもむくままに西東人にひかれてゆきめぐるかも  
〇いそがしと思ふころにおこたりのありとも知らで過しぬるかな  
〇病む人の我を待たずばつづつに見に赤城の山に行かまほしものを  
〇ふるさとに病める人らの待つらんにいそぎて我は歸らんと思ふ  
〇癒えざらむいのちと思へどいひかねて脈を見れば百四十あり  
〇わがゆくを月々待つといふからに如何なる都合もつけてゆきなむ

診にゆきて迎への人のあかるきを見るはうれしそいそ靴ぬく

「閃光記」は東京市日本橋區通三ノ八、春陽堂發行、定價一圓八十錢。

### 伊澤凡人著「藥草の科學」

本書は四六判三百頁、二百數十種の藥草に就いて一つ一つ原植物圖入りで説明され一般素人にも判る様に極めて平易に書かれてゐるので藥草の知識はこれ一冊で足りるほどである。野に山にハイキングの節は是非本書を携へて藥草の知識を養はれん事を希望す。

〇東京市日本橋通三丁目春陽堂發行。價一圓八拾錢

### 第二回 漢方短期講習會

一、日時 昭和十六年一月十日より五日間  
毎日午後二時より五時まで

一、講目 總論（特に學派の分類に就て）  
各論（特に治療の實際に就て）

一、講師 安 西 安 周

一、會費 講習費二十圓 入會金五圓

右希望の方は本年末日までに入會金を添へて左記會場宛に申込まれたし。

東京市杉並區高圓寺五ノ八二六

兩全堂安西醫院

(電話中野(38)三五五九番)

〔編輯後記〕  
〇多事多難な時局を孕んだまま、この年も逝く。ここに本年最終の編輯後記を書く。

〇龍野氏の論文は、先月號の竹山氏の「可能性と實現性の問題」に對する駁論である。あと一回で完結の豫定。

〇矢數有道、柳谷素靈兩氏は、御多忙中態々治験例の御寄稿を賜つた。共に貴重な御經驗である。

〇岡部素道氏は、鍼灸古典の研究家として定評ある方、特に本誌のために御執筆を願つたところ、締切間際に抱らず早速御快諾下さつた。今後も引つづき御寄稿下さる筈である。

〇石原保秀先生、最近御健康も快復せられ、久しぶりで、御研究の一端をお漏し下さつたことは、編輯者よりのごに堪えないところである。

〇深瀬氏は本年度の拓大漢方講座の修了生である。異色のある論文と思ひ、ここに發表する次第である。

〇編輯終了後、竹山氏から、漢方醫家に掲載の豫定である。  
〇石ころを靴さきで蹴る寒さかな 手を洋服のポケットに入れるのは、舊體制だ。そこで手袋がなくとも、手のごこえぬ秘訣を傳授しよう。拇指が掌に密着する様にして、グット力を入れて握ごぶしを作る。この恰好を入れておれば、ポケットに手を入れなくてよい。これはさる老人から聞いた口傳だが、小生もこれを實行して効果があつたので、御披露に及ぶ。次に夜間寝てから、足が温まらない時は兩足の拇指と拇指とを密着せしめてあると、早く温まる。燃料不足で、コトツを入れるのは燃策に副はないと思ひ、簡易な方法を公開した。御追試を乞ふ。